
総 説

専門職養成教育における「省察」

—ドナルド・ショーンの視座に基づく教師教育と医学教育の架橋—

木 塚 雅 貴*

京都府立医科大学大学院医学研究科応用言語学

“Reflective Practice” in Professional Education

—Seeking a Bridge Between Teacher Education and the Education
of Medical Doctors on the Basis of Donald Schön's Work—

Kizuka Masataka

Department of Applied Linguistics,

Kyoto Prefectural University of Medicine, Graduate School of Medical Science

抄 録

本稿の主題は、専門職養成教育における省察が持つ意味とその重要性に関わる Schön の論考を中心に、教師教育における省察能力の養成の現状を分析し、省察を基軸に据え、教師教育と医学教育に共通する事項を探り出しながら、専門職養成教育における省察の意義を捉えることにある。

Schön に始まる専門職と「省察」の関係性の解明により、専門職養成教育観が大きく変化し、それに伴い教師教育においては省察に関わる研究が加速し、また医学教育においても省察の必要性と重要性が唱えられるようになっていく。省察概念を基軸とする時、教師教育と医学教育に共通する事項が見出され、現代の専門職が直面している複雑かつ不確定的な状況に対応するための専門性の核の一つに、省察が位置づけられるのである。

教師も医師も、一様ではなくまた普遍的ではない「人間」と常に向き合い、彼らの問題を正しく特定し解決する方向を模索している存在であることに鑑み、研究分野を超えた学際的研究が今後必要かつ重要になると考えられ、省察概念を軸とする専門職の専門性概念の新たな構築を中心とする研究は、両者を結びつける極めて重要な学問的課題であると言える。

キーワード：専門職養成教育、省察、複雑性、不確定性。

平成24年3月23日受付

*連絡先 木塚雅貴 〒602-8566 京都市上京区河原町通広小路ル梶井町465番地

kizuka@koto.kpu-m.ac.jp

開示すべき潜在的利益相反状態はない。

Abstract

The aim of this paper is to clarify the significance of “reflection” in professional education: first by analysing its current importance in enhancing reflectivity in Teacher Education and the education of medical doctors, and then by investigating shared characteristics related to “reflection” in both disciplines.

Due to the great influence of Schön's works on “reflection”, the core concept of professional education has drastically changed: in Teacher Education, research on “reflection” has played a pivotal and dominant role, and in the education of medical doctors the necessity and importance of “reflection” has been emphasised in order especially to cope with the complexity and uncertainty in professional education.

As both school teachers and medical doctors deal with complex and uncertain human issues by identifying problems appropriately and seeking solutions, “reflection” could be considered as the most essential expertise, and, as a result, more collaborative interdisciplinary research works should be conducted.

In this sense, as “reflection” is an essential part of expertise in both disciplines, it can become the central axis to link research in Teacher Education and the education of medical doctors, which leads to create a new framework for expertise in professional education.

Key Words: Professional education, Reflection, Complexity, Uncertainty.

問 題 の 所 在

理科系の領域における専門職 (profession) の代表が医師であり、文科系のそれが法曹関係者 (裁判官・弁護士) であることは、世界的に異論のない事項であろう。専門職と認定され得る基準に関しては、半世紀以上に Lieberman¹⁾ が8項目を挙げており、類似の指標は現在も多方面で見出される。国際労働機構 (ILO)・ユネスコ (UNESCO) が1966年に教師を専門職に認定しているが、医師や弁護士は major profession と呼ばれるのに対し、教師は minor profession すなわち準専門職と呼ばれ²⁾、専門職としての位置づけが明確ではない。従って教員養成教育・教師教育は、これまで医師養成教育・医学教育を制度的なモデルに、その専門性向上を志向してきた³⁾。

一方、1983年に Schön が *The Reflective Practitioner How Professionals Think in Action* を刊行して以来、専門職の専門性概念は大きく転換され、「省察 (reflection)」を基軸とした専門職養成教育が各方面で議論されまた実施されており、特に教員養成教育・教師教育においては、1990年代以降、Schön の「省察」概念に基づく研究・教育が世界的な潮流を形成し、省察能力の養成に関わる論考が多数生みだされている。すなわち、専門職の専門性を制度という外

側からではなく、教師それ自体の内側から考察する方向に、研究・教育のパラダイム転換が進んでいるのである。

他方、医師養成教育・医学教育における省察は現在導入の段階にあり⁴⁾、その重要性が広く認識され始めていることから、今後その意義やそれを志向する教育の具体的方法に関わる研究が重要になると考えられる。

そこで本稿では、専門職養成教育における省察が持つ意味とその重要性に関わる Schön の論考を中心に、教員養成教育・教師教育における省察能力の養成の現状を分析し、省察を基軸に据え、教員養成教育・教師教育と医師養成教育・医学教育に共通する事項を探り出しながら、専門職養成教育における省察の意義を捉えることを主題とする。

以下では、まず初めに Schön の「省察」概念を明確にし、教員養成教育・教師教育における省察に関わる研究からの知見を捉え、その上で医師養成教育・医学教育における省察の必要性を考察し、専門職養成教育における省察を視点の基軸として両者の接点を見出すこととする。

専門職と「省察」

「省察」概念自体は、John Dewey が言及した “reflective action” に由来しており⁵⁾、Schön は、“reflective practitioner” (省察的実践家)を

「デューイの探究の理論を『実践的認識論』(practical epistemology)へと発展させ」⁶⁾、“reflective thinking”(省察的思考)を「専門家の実践の中核に定位」⁷⁾させ、「思考と活動、理論と実践という二項対立を克服した専門化モデル」⁸⁾を創出する役割を果たしたと言えるであろう。

Schönは、専門家による理論と実践の関係を問い直し、“Technical Rationality”(科学的原理と技術の合理的適用)に基づく「専門家の『技術的実践』」にかかわって、現代の専門家が『活動過程における省察』(reflection-in-action)を原理とする『反省的実践』(reflective practice)において専門性を発揮して⁹⁾いる点に注目した。「『技術的実践』が、どんな状況にも有効な科学的技術と原理を基礎とする」¹⁰⁾反面、“reflective practitioner”は、Michael Polanyiが言う経験に基づく「暗黙知(tacit knowledge)」を駆使しながら、「不確かで曖昧な問題状況に探りを入れ」¹¹⁾、「状況との対話を通して、問題を省察し」¹²⁾、「実践に対する反省的思考を通して自己の専門的な力量を高め」¹³⁾、「クライアントと共同でその問題の背後にあるより大きな問題へと立ち向かっていく実践的探究」¹⁴⁾を行っている。換言すれば、専門家は「自らの行動の中で暗黙のままである先行知識について省察し(中略)、確立された理論や技術の枠組みに依拠するのではなく、固有の事例に関わる新しい理論を構築する」¹⁵⁾のであり、知識を眼前の状況に単純に適用するのではなく、専門知と過去の経験を繋ぎつつ固有の状況と常に対話をしながら新たな状況が提起する意味を模索し、それにより新たな実践知を紡ぎだしているのである。従って、“...expertise is a situated, context-dependent concept.”¹⁶⁾であり、固有の事例が持つ意味への省察が重要になるのである。

この背景には、「現代社会が抱える諸問題は複雑かつ不確実」¹⁷⁾であり、「厳密に細分化された専門知識と技術の適用だけでは問題を解決できない」¹⁸⁾という事実がある。シヨーンは、「型通りの理論は、現実生活での混乱し、方向性が定まっていない実践上の問題解決には、あまり

効果を発揮しない」¹⁹⁾、すなわち理論の枠組みは「複雑な文脈で複合的な問題を解決する」²⁰⁾専門職の専門性には必ずしも適合せず、専門家の専門性を「活動過程における知と省察それ自体にある」²¹⁾と捉えたのである。

教師教育における省察

教師教育における省察に関わる研究は、1990年頃から世界的に顕著に見られるようになり、ほぼ同時期の日本においても佐藤²²⁾を代表とする先駆けの研究が見出され、以降の教師教育研究は、省察に関わる内容を最重要課題のひとつとする方向へ加速して行く。

特に近年では、professionalismの視点から、教師の専門性の中核を構成する要素としての省察に関する論考が見出される²³⁾。また、教員養成教育においても、4年間の養成期間内に省察能力をどのように育成するかに関わる研究が進められており、教育実践経験を有しない学生の実践知形成は重要な課題となっている²⁴⁾。なぜならば、教師の実践知は授業の事例研究を通して蓄積されるため、学校現場における実践経験の質と量が問われるからである。従って、授業観察を継続的に経験する中で授業に関する理論を考察し、観察した授業をディスカッションにより様々な角度から多面的に捉える事例研究を中核としながら、短期集中型の教育実習という実践を効果的に連関させることを通じて、実践知を有しない教員養成教育段階の学生の省察能力の育成が図られることが明らかにされている²⁵⁾。上記のような省察能力の育成は、養成教育の中心として理論と実践知の基礎を培う場である大学と、実践経験を蓄積し実践知を確かめる場である学校を常に往き来することにより促進されるのであり、このような方法は欧米の教師教育において顕著に見出される²⁶⁾。

省察を中心とする反省的実践に基づく授業研究では、「ある一つの教室の出来事や一つの方法の意味を検討したり、ある一人の教師や一人の子どもの活動や経験の意味を探究する事例研究として展開されて」²⁷⁾おり、「特定の教室に生起する個別具体的な経験や出来事の解明をめざ

し、主観を尊重した『物語的（ナラティブ）認識』を追求して、教師の実践的な見識の形成と教室における経験の意味と関係の編み直し²⁸⁾が行われている。まとめれば、「経験の再構造化、既存の知識や技能との関連づけ、授業を基礎づけている理念と認識の考察、新しい状況でどのように知識や技能を適用するかに関する決定²⁹⁾」が、省察という行為の持つ意味なのである。

この背後には、前項で言及した現代社会の複雑化があり、「子ども一人ひとりが抱える複合的な問題に対処し、具体的な状況に身において複雑な課題と対峙しながら、質の高い学びを触発し組織する活動を要請されている（中略）新しい教師像への転換³⁰⁾」が要因として機能していることは、明らかである。

以上のように、教師教育においては、教師の専門性の解明と専門的力量形成の観点から、省察が持つ意味やその能力の育成の方法に関わる具体的な研究が進められている。

医学教育における省察の必要性

近年医学教育においても、世界的に省察の重要性に注目が集まっており、Leinster³¹⁾は、Schönのreflective practiceを採り上げ、“reflection-in-action”と“reflection-on-action”を繋ぐ存在としてのmentor（指導医）に着目しながら、両者を取り込んだ効果的な学習システムの構築の必要性に言及し、Sandars³²⁾は“reflection”を医学教育を構成する本質的要素であると述べている。また、大生³³⁾は、プロフェッショナリズムの観点から「振り返り」の重要性に言及し、Crussが開発したP-MEX³⁴⁾という省察能力を評価項目として含んでいるスケールを採り上げている。さらに、学習方略の観点から、大西他³⁵⁾は「医療現場での日々の経験を通して省察（reflection）を促す方法（有意事象分析 Significant Event Analysis）」の導入の必要性に言及している。

この背景には、学問知や理論と実践の関係が比較的明確であると一般的に考えられている医学の領域にあっても、「医療内容の複雑

化³⁶⁾や「検査方法や治療方法の発達は、医療に対して多彩な選択肢を生むようになった³⁷⁾」ている現状があり、実際には今日の医学と医療が「正解が一つでなく、時代とともに変わり、常に不確定（uncertainty）さを特徴とする³⁸⁾」という事実が関係していると考えられる。すなわち、“reflective practice”を基礎づけた専門家の専門性を構成する要素の一つであるflexibilityは、医学においても必要とされるのである。また、「不確定（uncertainty）さ」は、専門家が直面している状況としての省察を基礎づけるSchönの基本概念であり、Fleming³⁹⁾も、21世紀の医師が対峙している特徴的な状況として、“Problem-solving, complexity, uncertainty”を挙げている。さらに、「医療が自らの限界を自己批判的に意識することは、専門家としてのどの程度自分の持つ技術を推奨するか、ということと直結する⁴⁰⁾」という文言は、専門家としての判断に自己批判的な「振り返り」が必要であることを示唆しており、医師の専門性には省察能力が密接に結びついていること及び省察の意義を明確に指摘していると言うことができるであろう。

まとめれば、医師が現在直面している課題の一つに、複雑で不確定な状況に対応するための能力の養成があり、それが省察と連関しているということであろう。

教員養成教育と医師養成教育の類似性

現代の教師も医師も、複雑で不確定な状況に置かれている点は共通しており、実践経験を有しない学生を対象としながら、実践現場の観察を行い、理論と実践を結びつける教育が行われている点⁴¹⁾も共通している。しかも、医師養成教育においては、症例検討会（カンファレンス）やProblem-based Learning（PBL）が頻繁に行われている状況に鑑みる時、医師の専門的力量形成にとって、事例研究による実践知形成が深く関与していることは明らかであり、医師養成教育・医学教育においても、省察の導入が唱えられる十分な根拠が見出される。特にPBLが「理論知と臨床（実践）知のより効果的な統合⁴²⁾」を

可能にすることから、PBLにより一つの事例を多角的に検討し、物事を多面的に捉える柔軟性 (flexibility) を涵養することは、「省察の最大の価値である自己理解と状況理解を促進する」⁴³⁾ ことに繋がると考えられ、省察能力の育成にとって重要であると言える。すなわちPBLによる事例検討は、「教科書に『この行いは正しい行いである。』と書かれていた様々な医療行為について、もういちど自省を行い、それらの行いが患者の何に対して、どの程度有益なことをもたらすかについて批判的に考える目を医療者に持たせること」⁴⁴⁾ と関連していると考えられ、まさに省察過程の一部を構成する事項であると言えるであろう。

教員養成教育と同様に、省察を行うためには「振り返る」基盤が必要不可欠であるが、医師としての経験を有しない医師養成教育段階の学生が省察することは、拠り所とする基礎がないために困難を極める。従って、ここで教員養成教育と同様に、観察が重要な役割を担うであろう。“reflective practice”における観察は、Wallace⁴⁵⁾ が言うように、“... another kind of experience to be analysed and reflected on, and then related as appropriate to the trainee's own practice.”であり、その後の観察や自らが実践を行う際に拠り所とするための意味を有している。単なる観察は、その場で起こっている事象を知ることには終始するが、観察対象の中に自らを置き、自分であればどのようにするかを考える態度で観察に臨めば、必然的に省察が有効に機能することに繋がるであろう。なぜならば、それは先行する知識や経験を「振り返り」、現在の自分がいる観察状況を客観的に捉えることと関連するからである。

上記のような学生の成長過程は、教員養成教育・教師教育においてはすでに明らかにされている⁴⁶⁾。現代社会から求められている専門職像に鑑みる時、教員養成教育・教師教育と医師養

成教育・医学教育の類似性が看取され、医師養成教育・医学教育においても、医療現場の観察を効果的に行うことを通して、省察能力の育成を促すことは可能であると考えられる。

結 語

本稿の主題は、専門職養成教育における省察が持つ意味とその重要性に関わる Schön の論考を中心に、教員養成教育・教師教育における省察能力の養成の現状を分析し、省察を基軸に据え、教員養成教育・教師教育と医師養成教育・医学教育に共通する事項を探り出しながら、専門職養成教育における省察の意義を捉えることであった。

本稿における考察により、省察概念を基軸とする時、教員養成教育・教師教育と医師養成教育・医学教育に共通する事項が見出され、現代の専門職が直面している複雑かつ不確定な状況に対応するための専門性の核の一つに、省察が位置づけられることが捉えられた。

上記の結論は、当然の帰結であると言える。なぜならば、教師も医師も、生身の「人間」という一様ではなくまた普遍的ではない児童・生徒や患者と常に向き合い、彼らの問題を正しく特定し解決する方向を模索している存在であるからである。そのような意味において、専門職の専門性概念の新たな構築は極めて重要な学問的課題であり、研究分野を超えた学際的研究 (interdisciplinary studies) が、今後ますます必要かつ重要になると考えられるのである。

謝 辞

医学教育における省察に関わる箇所については、ご多忙中にもかかわらず、北海道大学地域医療指導医支援センター／卒後臨床研修センター教授宮田靖志先生に、適切な文献のご紹介と執筆内容のご確認をしていただいた。末筆ながら、ここに深く感謝の意を表する。

文 献

- 1) Lieberman M. *Education as a Profession*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc, 1956; 2-5. において、次の8項目を専門職の特徴として挙げている。
 1. A unique, definite, and essential.
 2. An emphasis upon intellectual techniques in performing its service.
 3. A long period of specialized training.
 4. A broad range of autonomy for both the individual practitioners and for the occupational group as a whole.
 5. An acceptance by the practitioners of broad personal responsibility for judgments made and acts performed within the scope of professional autonomy.
 6. An emphasis upon the service to be rendered, rather than the economic gain to the practitioners, as the basis for the organization and performance of the social service delegated to the occupational group.
 7. A comprehensive self-governing organization of practitioners.
 8. A code of ethics which has been clarified and interpreted at ambiguous and doubtful points by concrete cases.

なお日本の医師の場合、免許の剥奪・停止に関しては厚生労働の管轄になっているため、上記4・5の「自律性 (autonomy)」が完全に保証されているとは言えないであろう。
- 2) Schön D. *The Reflective Practitioner How Professionals Think in Action*. Hampshire: Ashgate Publishing Limited, 1983; 23.
- 3) Department for Education. *The Importance of Teaching The Schools White Paper 2010*. London: Department for Education, 2010; 3. では、次のように述べられている。

The White Paper goes much further in raising standards and giving outstanding schools a much greater role in teacher training in the same way that our best hospitals train new doctors and nurses.

また、日本で2008年度に創設された教職大学院は、medical schoolやlaw schoolを標榜した教員養成版プロフェッショナル・スクールであり、近年文部科学省中央教育審議会において度々議論されている「教員養

成の高度化」の一環として、現在の4年制大学における教員養成を、医学部と類似のシステムにすることを企図した改革である。さらに、2002年8月の中央教育審議会答申「大学院における高度専門職業人養成について」並びに「大学の質保証に関わる新たなシステムの構築について」に基づき、医学部における「モデル・コア・カリキュラム」が作成され、その後教員養成「モデル・コア・カリキュラム」が教育大学協会により作成されている。

- 4) 山口恒夫。「師弟関係」モデルから「省察的実践家の育成モデル」へー医学教育の転換ー。医学教育 2007; 38/3: 161-167. では、招待論文として教師教育研究の立場からSchönの「省察的実践家モデル」を紹介する総説が掲載されている。

森田孝夫。「専門職」の育成 professional education. 医学教育 2007; 38/6: 421. では、「『省察』をどのように医学教育に取り入れて行くかが難問である」という外科医の記述が見られる。

Sandars J. *The use of reflection in medical education: AMEE Guide No. 44. The Medical Teachers 2009; 31: 688.* では、“reflection”とそれに伴う“action”の関係について教師教育で広く行われているアクション・リサーチを採り上げ、医学教育においてはそれがほとんど行われていないと述べている。

宮田靖志。プロフェッショナルリズム教育の具体的方法と評価。医学教育 2011; 42 suppl.: 21. 第43回日本医学教育学会「プロフェッショナルリズム教育の必要性とあり方」と題するシンポジウムの中で、宮田は「プロフェッショナルリズム教育の具体的方法と評価」に関わり「リフレクション能力」を採り上げ、その難しさに言及している。

田中昌弥。教育学研究の方法論としてのナラティブ的探究の可能性。教育学研究 2012; 78/4: 421. では、教師教育におけるNarrative Inquiryの第一人者の一人であるD. J. Clandininが、カナダのアルバータ大学医学部におけるNarrative Reflective Practiceに、要請を受けて参画していたことが述べられている。

- 5) Polland A. *Reflective Teaching (2nd edition)*. London: Continuum, 2005; p.13.

Dewey が意味している“reflective action”は、“...involves a willingness to engage in constant self-appraisal and development...it implies flexibility, rigorous analysis and social awareness.”であり、ここには“reflective action”を形作るキーワードが見出され

- る。“development”は、教師教育・医学教育いずれにおいても Continuing Professional Development (CPD) として欧米で広く用いられ、“flexibility”が“reflection”と教師の専門性 (expertise) に深く関与していることは、以下の3つの文献において言及されている。
- Moore A. The Good Teacher Dominant discourses in teaching and teacher education. Oxon: Routledge, 2004; 101, 105.
- 木塚雅貴. 授業観察とその省察を中心とする教員養成の方法に関する研究—省察能力の育成に着目して—. 日本教師教育学会年報 教師教育学研究の課題と方法. 東京: 学事出版, 2011; 20: 130.
- Johnson K. What makes a good teacher? Studying expertise in teaching skills. The Language Teacher 2011; 35/4: 42.
- なお、上記の拙稿では、教員養成課程在籍の学生の flexibility を示す1つの指標として、観察している授業の展開や活動内容について、「代わりの (alternative) 方法」を思考できることを挙げている。この点は、「検査方法や治療方法等の発達は、医療に対して多様な選択肢を生むようになった」という尾藤の指摘を踏まえると、医師養成課程の学生にも該当していると考えられる。
- 尾藤誠司. 新たな患者—医両者関係の中での医療者の役割. 京府医大誌 2011; 120/6: 404.
- 6) 佐藤 学・秋田喜代美 (訳). 専門家の知恵 反省的実践家は行為しながら考える. 東京: ゆるみ出版, 2001; 3.
 - 7) 同上.
 - 8) 同上, 215.
 - 9) 稲垣忠彦・佐藤 学. 授業研究入門. 東京: 岩波書店, 1996; 86.
 - 10) 同上.
 - 11) 佐藤 学. III 反省的実践家としての教師. 佐伯 胖・汐見稔幸・佐藤 学. 学校の再生をめざして 2 教室の改革. 東京: 東京大学出版会, 1992; 126.
 - 12) 佐藤 学. 教育方法学. 東京: 岩波書店, 1996; 74.
 - 13) 前掲11).
 - 14) 前掲12).
 - 15) 前掲2), 68.
 - 16) 前掲5), Johnson.
 - 17) 前掲6), 214.
 - 18) 同上.
 - 19) 吉田一郎 (監訳). 医学教育 ABC 学び方, 教え方. 東京: 篠原出版新社, 2004: 8.
 - 20) 前掲12), 195.
 - 21) 前掲6), 215.
 - 22) 佐藤 学. 教師の実践的見識を高めるために—授業の臨床的研究へ—. 総合教育技術 1月号 1990; 44/14: 89-103.
柳沢昌一. 実践と省察の組織化としての教育実践研究. 教育学研究 2012; 78/4: 425. には、1990年代の教育学研究における佐藤による Schön の積極的な紹介についての言及が見出される.
 - 23) Richards J. Exploring teacher competence in language teaching. The Language Teacher 2011; 35/4: 6. の中で、次のように述べられている.
...independent professionalism, which refers to teachers' own views of teaching and the processes by which teachers engage in reflection on their own values, beliefs, and practices.
 - 24) 前掲5), 拙稿, 142-143.
 - 25) 前掲5), 拙稿, 142-154.
 - 26) 木塚雅貴. イングランドにおける教員養成の事例研究—実情・特徴・課題の分析に基づく日本の教員養成への示唆—. 北海道教育大学紀要 (教育科学編) 2007; 57/2: 55-67.
木塚雅貴. イングランド・カナダにおける教員養成の比較研究—両地域における事例分析に基づく日本の教員養成改革への礎—. The Language Teacher 2007; 31/8: 3-6.
Kizuka M. Explorations of Initial Teacher Education in a university in England, with Special Reference to Trainees' Views on Practical Teaching Experience. 日本教育大学協会研究年報 2009; 27: 53-66.
木塚雅貴. 第3章 第1節 トロント大学における教員養成の方法と日本への示唆. 三石初雄・川手圭一. 高度実践型の教員養成へ—日本と欧米の教師教育と教職大学院—. 東京: 東京学芸大学出版会, 2010; 155-177.
 - 27) 前掲12), 78-79.
 - 28) 前掲12), 78-79.
 - 29) Cooper J M. The Teacher as a Reflective Decision Maker. Cooper J M(ed.). Classroom Teaching Skills (8th edition). Boston: Houghton Mifflin Company, 2006; 14.
 - 30) 佐藤 学. 1 現代社会の中の教師. 佐伯 胖・黒崎 勲・佐藤 学・田中孝彦・浜田寿美男・藤田英典. 教師像の再構築. 東京: 岩波書店, 1998; 20.
 - 31) Leinster S. 1: Approaches to Medical Education (A) The Case for New Curricula. Anglo-Japanese Conference on Medical Education 2005. Tokyo: Japan Medical Education Association, 2007; 12.
 - 32) 前掲4), Sandars, 694.
 - 33) 大生定義. プロフェッショナルリズム総論. 京府医

- 大誌 2011; 120/6: 399.
- 34) Cruess R, Mclroy J H, Cruess S, Ginsburg S & Steinert Y. The Professionalism Mini-evaluation Exercise: A Preliminary Investigation. *The Academic Medicine* 2006; 81: 74-78.
- 35) 大西弘高・錦織 宏・藤沼康樹・本村和久. Significant Event Analysis: 医師のプロフェッショナルリズム教育の一手法. *家庭医療* 2011; 14/1: 4-11.
- 36) 前掲5), 尾藤, 404.
- 37) 同上.
- 38) 堀原 一. 日本の医学教育学理論の温新と実践の創出. *医学教育* 2011; 42/5: 316.
この他にも, 医療現場における「不確実性」については,
Hall K H. Reviewing intuitive decision-making and uncertainty: the implications for medical education. *The Medical Education* 2002; 36/3: 216-224.
Dornan T, McKendree J & Robbe I J. Medical education in an age of complexity, uncertainty and reflection. A coda to the Flexner centenary. *The Medical Education* 2011; 45/1: 2-6.
Wayne S, Dellmore D, Serna L, Jerabek R, Timm C & Kalishman S. The Association Between Intolerance of Ambiguity and Decline in Medical Students' Attitudes Toward the Undeserved. *The Academic Medicine* 2011; 86/7: 877-882.
が見出される.
- 39) Fleming K. 4. Doctors in the 21st Century. What does Society Require of Its Doctors? — Unique Characteristics of the Doctor in the 21st Century. *Anglo-Japanese Conference on Medical Education* 2005. Tokyo: Japan Medical Education Association, 2007; 92.
- 40) 前掲5), 尾藤, 408.
- 41) 前掲19), 94.
- 42) Schmidt H. A review of the evidence: Effects of problem-based learning on students and graduates of Maastricht medical school. Berkel H, Scherpbier A, Hillen H & Vleuten C (eds.). *Lessons from Problem-based Learning*. Oxford: Oxford University Press, 2010; 232.
- 43) 前掲4), Sandars, 690.
- 44) 前掲5), 尾藤, 408.
- 45) Wallace M. *Training Foreign Language Teachers A reflective approach*. Cambridge: Cambridge University Press, 1991; 16.
- 46) 前掲5), 拙稿, 142-154.
木塚雅貴. 大学院における教科実践力強化プログラム [英語科]. 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発センター 第6回 教師教育実践交流ワークショップ記録集 教科実践力を大学院で伸ばす 2008; 44-57.
木塚雅貴・木村吾勝. 離島の教師の専門的成長への支援—北海道奥尻島における英語教師の授業改善の軌跡—. *へき地教育研究* 2009 2010; 64: 29-47.
Kizuka M. 3.6 How can teachers become reflective practitioners?. Briony Beaven (ed.). *IATEFL 2009 Cardiff Conference Selections* 2010; 59-61.

著者プロフィール



木塚 雅貴 Masataka Kizuka

所属・職：京都府立医科大学大学院医学研究科応用言語学・教授

略 歴：1987年3月 早稲田大学第一文学部文学科英文学専修 卒業

1989年9月 英国エセックス大学 (University of Essex) 大学院言語学応用言語学専攻 修了

1991年3月 東京大学大学院教育学研究科学校教育学専攻 修了

1991年4月～1994年3月 目白学園女子短期大学英語英文科 専任講師

1994年4月～2003年8月 東京女子大学文理学部英米文学科 専任講師・助教授

2003年9月～2009年10月 北海道教育大学大学院教育学研究科英語教育専修・教育学部英語教育講座 (釧路校) 准教授

2005年3月～2006年3月 英国ロンドン大学 (University of London) 大学院教育学研究科 (Institute of Education) ドクトラルスクール 研究員 (文部科学省大学改革推進経費による)

2009年11月～現職

専門分野：英語教育の方法・実践研究, 教員養成教育・教師教育, 授業研究

主な著書：1. 木塚雅貴, 小西友七・南出康代, ジーニアス英和大辞典 (初版), 東京: 大修館書店, 2001.

2. 木塚雅貴, 中学校英語科教諭調査結果, 桑原敏明, 学級編制に関する総合的研究, 東京: 多賀出版, 2002; 365-397.

3. 木塚雅貴, 竹林 滋・東 信行・寺澤芳雄・安藤貞雄・小島義郎・河上道生, 英和大辞典 (第6版), 東京: 研究社出版, 2002.

4. 木塚雅貴, 小・中連携を「英語」ではじめよう!, 東京: 日本標準, 2008.

5. 木塚雅貴, トロント大学における教員養成の方法と日本への示唆, 三石初雄・川手圭一, 高度実践型の教員養成へー日本と欧米の教師教育と教職大学院ー, 東京: 東京学芸大学出版会, 2010; 155-177. 他

主な論文：1. 木塚雅貴, 授業研究と「科学」, The Language Teacher 1999; 23/7: 17-19. 全国語学教育学会.

2. 木塚雅貴, アクション・リサーチの特質—「科学的授業研究」との比較を通して, The Language Teacher 1999; 23/12: 24-27. 全国語学教育学会.

3. Kizuka, M. Professionalism in English Language Education in Japan. English Language Teacher Education and Development 2006; 9: 55-62. Centre for English Language Education, University of Warwick.

4. 木塚雅貴, イングランド・カナダにおける教員養成の比較研究—両地域における事例分析に基づく日本の教員養成改革への礎—, The Language Teacher 2007; 31/8: 3-6. 全国語学教育学会.

5. Kizuka, M. Explorations of Initial Teacher Education in a university in England, with Special Reference to Trainees' Views on Practical Teaching Experience. 日本教育大学協会研究年報 2009; 27: 53-66.

6. 木塚雅貴, 授業観察とその省察を中心とする教員養成の方法に関する研究—省察能力の育成に着目して—, 日本教師教育学会年報, 東京: 学事出版, 2011; 20: 142-154. 他